

## 「死に勝利されたキリスト」第Iコリント15章50-58節

今日は先に召された故人を偲んでの召天者記念礼拝です。私たちは人の死に直面する時に、否が応でもおのが死について考えさせられ、やがて自分にも訪れるその死に備えてどのような生き方をすべきかと考えさせられます。特に昨年から人類全体を襲っているコロナ禍の試練によって私たちの生活は大きく変えさせられたばかりでなく、私たちの死に対する備えについてもいろいろと考えさせられています。私はコロナ禍になってから、毎朝起きますと、「神さま、今日もあなたの憐れみによって生かされていることを感謝します。健康が守られていること、コロナ感染から守られていることを感謝します。」という祈りをもって一日を始めようになりました。今まではこうして生きていることを当たり前のことのように考えていたり、健康であることを感謝するということをあまりしていなかったなど反省させられた次第です。私たちはよく病気になってみて健康であるということがいかにありがたく感謝なことであるかに気付かされると言われます。同じように死の危険に直面させられると、生かされていることがいかに感謝なことであるかがわかるようになるのです。ある哲学者は、「人間にとって一番確かなことは、人間はいつか必ず死ぬということである。そして、一番不確かなことは死ぬ時期である。」と語っていますがまさにその通りだと思います。確かに、私たち人間は一人の例外もなくこの死の厳粛な事実から逃れることはできないのであります。

さて、今日は私たちがあまり考えたくないこの死の問題を取り上げ、死への勝利について共に考えてみたいと思います。まず54-55節をご覧ください。ここでパウロは「死は勝利に呑み込まれた。死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」と旧約聖書の御言葉を引用していますが、何故このようなことを語っているのでしょうか。

それはイエス・キリストの十字架の死と復活によって人間にとって最大の敵であった死への勝利がもたらされたからです。死は確かに人類が始まって以来、人間を悩まし、苦しめ続けてきた最も恐ろしい敵でありました。聖書によりますと、最初の人間アダムとエバが神の戒めを破り、罪を犯して以来、神の刑罰として死が入り、人間は死ぬ者となりました。しかし、イエス・キリストはこの死の問題から私たちを解放するために十字架に架かり、死んで三日目に復活されたのでした。このイエス・キリストの救いにより罪が赦され、死への勝利が与えられたのです。それゆえ私たちキリスト者にとって、死は永遠の別れではありません。そしてこの死で終わりではない。死んだ後、愛するイエスの待っておられるパラダイスに行くのだとの確信は死の悲しみや恐怖におびえる私たちに大きな平安を与えてくれるのです。

聖書は私たちの肉体の死は魂が肉体を離れ、この地上からパラダイスへ移されることであると教えています。ですからこの天国を信じ、愛する者とまた会えることを信じる生き方は、私たちをこの地上にあって励まし、益々信仰に熱心に歩ませてくれるのであります。これに対して、死後の世界や天国を信じていない人たちがいます。彼らは人間死んだらすべてが終わると考えます。このような人にとって死はこの世の人生のゴールとなります。しかしもしも死んですべてが終わり、なくなるのだったら、この地上でどんなにお金をため、名声を博し、偉大な業績を残したとしても一体それが何になるのかということです。それは人間として、ただ飲んで食べて楽しむだけの目先の享樂を求めると虚しい人生となります。

それでは私たちはどのようにしたら、この死に勝利する人生を歩むことができるのでしょうか。パウロは、それは神がイエス・キリストによって、死に対する勝利を与えて下さったからであると語ります。(57節) イエス・キリストはヨハネの福音書3章13節で「だれも天に上った人はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」と語っています。つまり、イエス・キリストこそ、まことに天から下ってきた唯一のお方であると言う

のです。だからイエスは天国のことを誰よりも良く知っていると言うのです。だから、イエス・キリストの語る言葉は間違いない、本当に信じるに値する言葉であると言うのです。また、パウロはその最大の証拠として、Iコリント 15 章 20 節で「キリストは眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と語っています。それでは、どのような人がこのような死からの復活、死からの勝利にあずかることができるのでしょうか。

それは神が用意して下さったイエス・キリストの十字架による罪の贖いと復活を信じ、受け入れる者です。52 節をご覧ください。

ここで語られている終わりのラッパというのはいつ鳴るのでしょうか？それは今までも学んできましたように、あのイエス・キリストが再びこの世に来られる再臨の時であります。聖書によりますと、イエス・キリストを信じて死んだ魂はすべてパラダイスという死者の魂が置かれている所に行きます。このパラダイスという所は中間状態と呼ばれ、イエス・キリストの再臨までキリストを信じた魂が待っている場所です。そして、イエス・キリストが再びこの世の終わりの時に再臨される時、まず最初にこのパラダイスにいる魂が復活し、新しいからだ、罪のない、朽ちることのない復活の栄光のからだを与えられると言うのです。

そして、次にその時、地上に生き残っている私たちキリスト者が一気にキリストの許に引き寄せられます。これを携挙といいます。そこで、同じく新しい朽ちることのない復活のからだ、罪のない栄光の体に変えられるのです。そして、このように新しい復活の朽ちない体を頂いた私たちは先に召された者と再会することができ、共に神の創造された新しい天と新しい地に永遠に住まうことができると言うのです。イエス・キリストを信ずる者にはこのようなすばらしい復活のからだと死への勝利、天国の希望が約束されているのです。

最後に 58 節をご覧ください。この 58 節の御言葉は、今までパウロが 15 章で語ってきたことの結論の言葉であります。パウロは私たちに「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。」とこの地上にあって私たちがどのように生きるべきかを語っているのです。

確かに私たちキリスト者の地上での生涯においても、その信仰がゆり動かされるような試練がたくさん起こってまいります。病気や事故で愛する人を失うという試練だけでなく、今回のコロナ禍のような試練も私たちに死への恐怖、不安へと導き、私たちの信仰を根底から揺すぶるのです。そしてそのような中で、もう「主のわざに励む」なんて到底できない。自分の信仰を保つだけで精一杯である。いやその信仰さえも崩れてしまいそうになることだってあるのです。しかし、パウロはそのような時にこそ「私たちは堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。」と勧めているのです。それは私たちにはすでにイエス・キリストによる救いと死に対する勝利が与えられているからであります。ですから、私たちキリスト者の労苦は主にあって決して無駄にはならないからです。

この主のみわざとは福音宣教と教会形成のわざと言えます。そしてこの「主のみわざ」は主イエス・キリストの復活を持って本格的にスタートしたのであります。イエス・キリストの十字架の死に直面し、失望落胆していた弟子たちを立ち上がらせ、世界宣教へと向かわしめたもの、それはイエス・キリストの復活であります。それゆえ、私たちもまた死に勝利をされたイエス・キリストを宣べ伝え、復活の命、復活の希望を告げ知らせるのです。そして、もう一つの大切な主のみわざ、それは世界中にキリストの教会を建て上げることであります。何故なら、この地上でのキリスト教会の姿にこそ、私たちはやがて来る天国の雛型を見ることが出来るからであります。そして私たちはこの教会に属し、キリストの花嫁として、再び来たりたもう花婿なるキリストを共に待ち望むのであります。

私たちも先に召された故人たちの信仰にならい、この地上にあって生きる限り、「堅く信仰に立ち、動かされることなく、いつも主のわざに励む者」となりたいものです。